# 殺すということ話

ku-nn

# 小学校時代

「ねぇねぇ～！今週末にカラオケいかない？」
「行く行く～」
「はぁ？あんたに言ってない。」
「！？」
こんな事が何回かあった。
私は鬼道結衣。学校では嫌われているようです。
去年まではこんなんじゃありませんでした。
いつも私の周りには友達が集まっていて、幸せでした。
いじめられる原因は多分妬みだと思います。
私は自分で言うのもなんですけど、完全無欠でした。
勉強なんて９５点未満をとった事はありません。
足も学年一ずば抜けて速いです。
おまけに容姿も整っています。
男子から何回告白されたかなんて覚えてないです。
・・・私は別にモテようとしているわけでもないし、勉強で頑張っているのは中学受験のため。
足が速いのは生まれつき。嫉妬されても困るんだけどな・・・
ある日、クラスの中井美紅に話かけられました。
「あんたウザい。私の好きな高橋君から告白されたでしょ？」
「えっ・・・そうだけど。私なんか変なことした？」
「何にもしないでモテる所がマジむかつく。どうせモテるためにオシャレしてるんでしょ？」
全く何でこんな事でキレるんだ？みんなもそう思うよね？・・・え！？
「男子から告白されるために、オシャレしてるの？」
「男子はオモチャじゃないのよ！」
全く理不尽だ。
最初はこんな事だったと思う。それからだ。少しずつみんなが離れていったのは。

## それから中学校へ

・・・最悪
中学受験に落ちた。
みんなと同じ学校へ行くことになる。
・・・まぁ違う学校から来た人と友達になればいいや。
この考えは甘かった。
新しいクラスに入る。そして私の机にすわ・・・
・・・えっ！？
机に落書きされていた。思わず涙がでてきた。
中学受験落ちたの？ざまぁ！この学校くんな！
そう書かれていた。
・・・ここに来たくて来たんじゃない。落ちちゃったものは仕方ないじゃん！
先生に言うのは私のプライドが許さない。一人で黙々と落書きを消し、席に着く。
その日はこれだけで済んだからよかった。
それから1週間後だ。本格的ないじめがはじまったのは。
私がトイレに入った時、5人近くトイレに入ってきた。
3人に押さえつけられ、背中や鳩尾を殴られる。
・・・苦しくて声が出ない。助けも呼べない。
休み時間終了のチャイムがなった。それで解放される。
・・・助かった。これはさすがに先生に言おう。
この判断は間違っていた。
先生に相談したら、その５にんはきつく注意された。
・・・軽薄な言葉。そんな事誰だって言える。そういう人の限って、またやるものだ。
この日の学校帰り、５人が現れた。
いきなり手、口をつかまれ、公園のトイレにつれていかれた。
「ちくった仕返しだ！」
また鳩尾を蹴られる。我慢できず、吐いてしまった。
「汚～い！」
次は頭を踏まれる。
・・・痛い・・誰か・・助けて！
「ほう、いじめか？」
個室トイレから誰か出てきた。同じクラスの壺富だった。
「別に。」
「いじめにしか見えないけど。ばかだねぇ～こんな所でやるなんて。通報されるんじゃない？」
「もういい！こんなやつやっちまえ！」
一人が動き出す。顔面を狙ったパンチだ。

「いきなり顔ですか。」
そういいながら、その腕をつかみ、投げ飛ばした。
ほかの３人も襲い掛かる。
最初の一人に足払いをかける。残りの二人はまとめて背負い投げをした。
「弱い。くだらない。そんなんで人をいじめるなんて。」
「退散よ！退散！」
５人は逃げ出した。
「結衣さん、怪我はない？」
「大丈夫です。ありがとうございます！」
「人として当然のことをしただけよ。」
・・・かっこいい！王子様？いや、女か。
「あの・・・今のなんですか？」
「柔道よ。」
「私に教えてください！」
「いいわよ。それと・・・敬語つかわないでいいよ。」
「ありがとう！」
その日からだ。遅い時間まで一緒に練習した。
柔道のうではめきめきあがった。
ある日、また５人にトイレに呼び出された。
「あのときの仕返しよ！」
４人が襲い掛かる。
・・・大丈夫。私は弱くない。
あの日の壺富がやったようにぼこぼこにした。
この日からいじめはまったくなくなった。

## 青木との出会い

いじめがなくなってからも、柔道をやった。
昔からなんでも器用にこなしていたから今では、壺富よりも強い。
高校は壺富と違うところへ行った。
・・・中学で最初にできた友達と別れるのはつらいな。
新しい教室に行く。自分の机を見る。
・・・落書きされてない！
あたりまえのことだが、涙が出るほどうれしい。
「友達いっぱい作るぞー！！」
・・・部活はどうしよう？
こんなふうに考えたのは４月の中旬。
・・・柔道部とかあればいいんだけどないなぁ～
「そうだ！同好会みたいなの作ればいいんだ！」
さっそく友達をさそったが、みんな柔道をやった事がない。
・・・経験者！経験者でもいいからほしい！
その時だ。運命的な声がした。
「武道したいなー！」
・・・たぶん経験者だ！チャンス！
「えっ！？武道したいんですか？」
かなりぶりっこになった。成功するか？
「そうだけど」
のってきた！
こんな感じで柔道同好会がスタートした。
・・・肝心なこと忘れてた。
部活じゃなきゃ武道館使えないんだ！
先生に何度お願いした。
しかし、顧問をやってくれる先生はいなかった。
・・・いいよ！かってに使ってやる！
職員室の外を見ると、昨日武道をしたいといっていた男子を見つけた。
・・・青木だっけ？
「青木君？だよね。」
「うん。そうだけど。」
・・・なんか男っぽくない。案外マザコンとかだったり？
「武道館いこ！」
「えっ！？先生必要じゃなかったっけ？」
「ばれなきゃ大丈夫！」

わざと大きな声でいった。
・・・だれも止めないから職員室の先生みんな同罪！やったー！
武道館についた。
「さぁ、早速柔道しましょ！」
「僕やった事ないです」
・・・はぁ？うそでしょ？・・・そうだ！気づいてたことにしよっと！
「だと思った。」
「えっ？」
「だって青木君、足だって遅いし、スタミナもない。力だってないもの。
・・・どーだどーだ！地味に悪口いってやったぞ！
「取りあえず体力作りからかな。6時まで走ってきて。あと何周走ったか教えてね。」
「はい」
・・・あーあ。どうでもいいやついれちゃった。暇つぶしでゲームでもやるか。
スマホのゲームで遊んだ。
６時になった。青木が戻ってきた。
「何周？」
「９周。」
・・・少なっ！それでも男！？
「次は最低２桁ね。じゃ、解散！」
・・・はぁ。あんなやつ入れるんじゃなかった。でもなんで武道したいなんて思ったんだろう？
あんなにひょろひょろで才能のかけらもないのに・・・
この日から、青木観察が始まった。

## 知った事実

青木観察一日目。
取りあえず尾行する・・・ってストーカーじゃねぇか！
気が付いたこと一つ目、一人でいることがほとんど。
・・・友達いないの？
そう考えたけど違った。クラスの人気者の倉井とお弁当を食べている。
青木観察二日目。
・・・あれ？
青木君が小室、藤沢、佐藤に呼び出されてる。しかもトイレだ。
・・・嫌な予感がする。
取りあえず女子トイレから聞き耳をたてる。
「おれのオモチャ。楽しいぜ！」
小室の声が聞こえた。そして何かを蹴った音。青木君の嗚咽。
・・・いじめだ！
しばらくすると、三人が出ていった。
「なんでいじめられるようになったのかな？つらいよ・・・」
青木君の声が聞こえた。それを聞いた瞬間、トイレに駆け込み、吐いた。
・・・うえ・・・気持ち悪い・・・
青木君も私と同じ。自分の過去と重なる、重なる、重なっていく・・・
私は精神状態が安定しなくなった。
・・・もうあの時の事は思い出したくない！もうやめてくれ！
そのあとの記憶はない。気が付いたら保健室にいた。
「よかった気が付いた！」
同じクラスの香だ。
「私、どうなってた？」
「トイレで気絶してたの。もう心配させないで！なんで気絶したの？気分でも悪いの？」
そうだ！この際だから青木君の事を言おう。
「青木くんが・・・」
「青木くんの事なら知ってる。いじめでしょ？」
「えっ・・・なんで知ってるの？」
「私、小室君と付き合ってるの。」
「！？」
「あのいじめには誰かが命令してやってるみたい。小室君が言ってたの。命令にしたがわなきゃ、俺の身があぶないって。本当はやりたくないみたい。」
「じゃぁその命令出している人って、誰？」
「さぁ？小室君が教えてくれないからわからない。」

「・・・そう。わかった。ありがとう。」
「じゃあ結衣はゆっくり休んでて。私、授業に戻るから。」
そういって香は去った。
・・・だれだろう？
そんな事より私にできる事はないだろうか。あの時の私が一番うれしかった事は何だっけ？
・・・あぁ！柔道だ！
あの時壺富に教えてもらった柔道で私は乗り切ったんだ。
・・・青木君は柔道初心者だけど、いますぐ実践できるような実用的な技を教えなければ・・・
一番簡単なのは、一本背負いだろう。
・・・今日教えるか。
今日の放課後、いつも通りに青木君が来た。
いつも通り走らせた後、一本背負いを教えた。実用的なやり方で。
殴られそうになったときに、それを避けて前にバランスを崩させた後、流れるように投げ飛ばす方法だ。
初心者にはやっぱり難しいのかな？私のパンチをまともに鳩尾にくらっている。
・・・なんとか今日中にマスターさせよう。
この日の練習は９時ごろまで続いた。
それからしばらくたって、青木観察をもう一度した。
小室、藤沢、佐藤に呼び出されていた。
・・・青木君、倒していいのよ。
いつも通り女子トイレから様子をうかがった。
「ストレス解消だ！」
・・・今よ！勝てるわよ！
ズドン！
何かが投げ飛ばされた音がした。
・・・やったのかしら？
勢いよく男子トイレから出て行く青木君。
・・・ナイスよ！これでいじめもなくなるわね！
このとき、私はここで終わると思っていた。まさか青木君にまた災難が降り注ぐとは思わなかった。

# いじめの中心核

もういじめは終わったと思ったので青木観察をやめた。
もう青木君は大丈夫そうだ。
いつも倉井君と話している。
そんな中、突如学級会が開かれた。
学級委員の一言で学級会がスタートした。
「今日の議題はいじめについてです。」
・・・青木君の事？
先生のひとことに思わず絶句した。
「今回は青木君が小室君、藤沢君、佐藤君のことをいじめてることについて話し合います。」
・・・えっ？逆じゃないの？
「昨日、この３人からいじめの相談を受けました。話によると、３人の事を投げ飛ばそうとしているらしいです。
それで３人だけになる機会を狙っているということでした。なので昨日、ずっと３人のそばについていてあげた
ところ、青木君があとを追ってきました。」
・・・えっ？青木君が？
青木君が反論した。
「僕が追いかけたのは、３人に上靴を引き裂かれたからです！」
足をみる。たしかに縫い合わせた後がある。
佐藤が反論した。
「僕らが引き裂いたのを見たんですか？」
「えっ・・・見てないけど・・・」
「証拠もないのに僕たちを疑うなんて最低だと思います。それに僕らが３人だけになるのを狙っていた事も怪しすぎます。」
周りを見る。みんな青木君の事をにらみつけている。
・・・嘘でしょ？
青木君はこの後、責められ続けた。青木君は放心状態になっていた。
・・・事情を把握しなきゃ！
放課後、真っ先に香の席に行った。
「小室君たちが言っていたあれ、本当なの？」
「たぶん嘘だと思う。だって小室君泣いてたもん。」
「小室君が？」
「うん。彼、サッカー部だから校庭にいけば会えると思うよ。話してきたら？」
「ありがとう！じゃぁね！」
そのまま全速力で校庭にむかった。

小室君はすぐに見つかった。
「小室君！ちょっとこっち来て！」
小室君を体育館裏に呼び出した。
「上靴引き裂いたのって、小室君たちでしょ！」
「・・・違うよ」
「嘘いうな！」
「・・・違う！」
「本当のことをい・・・」
「違うんだ！！！」
「！？」
「・・・違う。」
「本当は何？あなたが命令されてこんな事してるのは知ってる。別に小室君は悪くないよ。」
「なっ！？誰に聞いた！？」
「そっちがいったら教えてあげる」
「俺たちだよ・・・これでいいだろ？」
「もう一つ。誰の命令？」
「それは口が裂けてもいえない。」
「そう・・・」
「こっちの番だ。誰からきいた？」
「あなたの彼女。」
「えっ・・・」
「じゃあね！」
小室君を置いて教室に戻った。
・・・結びついた。
誰に命令されたかと聞いて、命令されたを否定しなかったという事は誰かに命令されているのは事実。
そして上靴を引き裂いたのは３人を追いかけさせるため。
いじめで心がぼろぼろの青木君を学級会で仲間がいないという事を証明された。そういう人が後にする事は自殺。
青木君が自殺したらあの３人も精神状態が不安定になり、全てが公に出る事を恐れ、自殺。
このことから考えられるのは、いじめの中心核は個人的に青木君に恨みを持っている人ではなく、人が死ぬのを楽しんでいる人。
・・・死の連鎖を食い止めるためにはまず、青木君を助ける事。
こういう時、自殺をする場所は話題にしてほしい所。
つまり教室。
家では親を悲しませるため、やらないものだ。
教室で待っていれば、必ず来るだろう。

それまで隠れている事にした。
午前二時。
誰かが教室に入ってきた。
ライトを持っている。青木君だった。
・・・推理があたった！
片手にロープを持っている。
・・・いまだ！
「そんなことして何かが変わると思う？」
そう言い放った。
・・・ここ言わなきゃいけないのは青木君が誰かに必要とされている事。
「あんたの人生はあなただけの物じゃないのがわからないの？将来、あなたは誰かに必要とされるのよ！その人たちを裏切るの？」
・・・私かっこいい！
「じゃあ、がんばってね」
そういって教室をでた。
・・・終わった・・・
校門のところまで歩いた時、誰かに肩を掴まれそうになった。
「！？」
間合いをとる。
「どうして俺のゲームを止めちゃうわけ？」
「！？」
そこにいた意外な人物に、思わず息を呑んだ。いじめの中心核だった。
・・・怖い
いきなりそういう感情がわいてきた。
・・・こいつを倒せばいじめがなくなる！
勇気を奮い起こした。